

[講演要旨]

歴史の構想力：Unthinking History

野家啓一（東北大学名誉教授）

わたしは相対主義の立場(relativist position)

をとっている。このことは十分に自覚している。

ヘイドン・ホワイト『実用的な過去』

1) 20 世紀以後の歴史哲学は、二度にわたる「言語論的転回」を経ることによって大きく変貌した。一言でいえば、世界史の流れを俯瞰して歴史総体の意義と目的を論じる、ヘーゲルの『歴史哲学講義』に代表されるような、ヨーロッパ中心主義の衣を纏った「大きな物語」の終焉である。それに代わるように 20 世紀前半に登場したのが、フレーゲ、ラッセル、ウィトゲンシュタインらによって領導された第一次の「言語論的転回」であり、それに伴う分析哲学の隆盛にほかならない。歴史哲学の分野では、ウィーン学団の C.G.ヘンペルが科学的説明と歴史的説明の同型性を主張して「被覆法則モデル」を提起したが、性急に「統一科学」の理念を追求したその試みは、中途半端な「説明スケッチ」の域に留まり、挫折せざるをえなかった。

歴史学の領域において、20 世紀後半にソシュール言語学に淵源するポスト構造主義言語論の影響下に第二次「言語論的転回」を主導したヘイドン・ホワイトは、『メタヒストリー』（1973）の序論「歴史の詩学」のなかで、自分は「歴史学の作品を《物語性をもった散文的言説という形式をとる言語的構築物》として把握するつもりである」と述べている。歴史は言葉によって構築されるものであり、それゆえ修辭的要素が不可避的に介在する、というこの見解に私はまったく異論はない。というのも、ヘロドトスが歴史叙述に中動態を用いて以来、優れた歴史家たちは修辭の技法と洗練に心を砕いてきたからである。

「無字社会（宮本常一）」や「無文字社会（川田順造）」にも口頭伝承という形で歴史や歴史意識はありうるが、「言葉のない世界（田村隆一）」に歴史はありえない。ハイデガーの物言いを借りるならば、「石くれは無歴史的」であり「動物は歴史貧乏的」であるのに対し、言葉をもつ「人間のみが歴史形成的」なのである。あるいはそれを、人間は「物語る動物」であると言い換えてもよい。物語を語るためには、感性だけでも悟性だけでも足りず、それらの「共通の根」である構想力（想像力、*facultas imaginandi*）の働きを必要とするのである。

2) 私が『物語の哲学』（1996）や『歴史を哲学する』（2007）において「歴史の物語り論」を構想するに際して最も強い影響を受けたのは、アーサー・ダントの名著『歴史の分析哲学』（1968、後に『物語りと知識』1985 と改題）とマイケル・ダメットの論文集『真理という謎』（1978、「過去の実在」1969 を含む）であった。これら両著作は、年代的にも内容的にも、二つの言語論的転回を媒介し架橋する地点に位置している。すなわち、ダントの著作は

標題からして第一次言語論的転回の所産でありながら、分析哲学の狭隘な制約を乗り越え、物語り論 (narratology) への道を切り拓くことによって、第二次言語論的転回を準備したのである。その意味では歴史哲学におけるダントの役割は、科学哲学においてクーンの『科学革命の構造』(1962) が果たしたそれとよく似ている。

ダントの物語論を初めて本格的にわが国の哲学界に紹介した黒田亘によれば、ダントの功績は「過去とは過去を語るわれわれの言語的行為によって構成されるもの」であること、そして「いったん起こった出来事の意義は決して完結することはない」ことを明らかにしたことにある(『知識と行為』1983)。後者のテーゼは、突き詰めれば「過去が変化すること」を意味する。それに対して直観主義的意味論を基盤に、過去時制言明への二値原理の適用を保留することによって「歴史の反実在論」を主唱してきたダメットは、『真理と過去』(2004) においては「真理値リンク」を梃子にして「過去についての言明は、その言明が指していた時点で起こったことと、その言明がその時点で持つに至った真理値に即して今なお真か偽かでなければならない」と主張するに至った。つまりは実在論に大幅に譲歩して「過去は変化しない」というわけである。

私自身はダントの立場に与してダメットの「転向」からは距離を置きたいと考えている。それゆえ私の立ち位置は人類学者クリフォード・ギアツの卓抜な表現を借りれば「反=反相対主義(Anti Anti-Relativism)」ということになるだろう。もちろん、ここでの二重否定は直観主義論理に即して理解されねばならない。Unthink (考えをほどく) という言葉をタイトルに掲げたゆえんである。